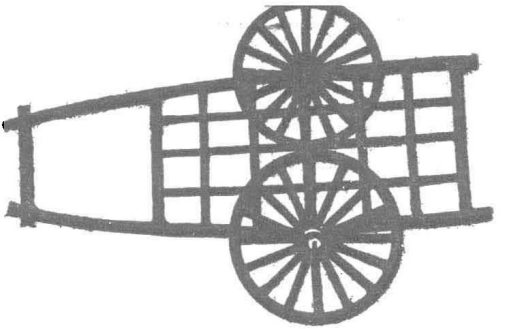
荷車の歌

山代巴

筑摩書房

荷車の歌

山代巴



筑摩書房

荷車の歌

一九七六年五月三十日新装版第一刷発行

著　者　山代　巴

発行者　井上達三

発行所　株式会社筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二ノ八
電話東京二九一―七六五一（代表）
振替東京六―四一二三
郵便番号一〇一―九一

多田印刷　積信堂製本

©一九五六　山代　巴

（分類）0093　（製品）80140　（出版社）4604

目次

くまごの話から……5
巡礼……19
ほら穴の握り飯……39
ツル代とオト代の孝行……63
心の虫……85
ナツノの心の虫……105
受難つづき……116
棟木の雪駄あと……134
気楽な家……146

さかだつ鱗……165
妾とともにいて……177
最後の宝……203
あとがき……213
新版をだすにあたって……219

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

荷車の歌

（長篇）

装幀　大竹久一

挿絵　永井潔

くまごの話から

セキさんはもう七十六歳で、髪の毛はすっかり鉛色になっているが、子供のように無邪気なおばあさんで〝三次は茗荷の子でかわばかり〟と、川に包まれた三次の歌や〝三次育ちは小鳥の育ち、粟やくまごで日をすごす〟と、くまごで暮した頃の三次地方の歌を沢山知っていて、いい声で歌ってくれる人だ。

「おばあさん、くまごとはどんなもの」

と聞くと、

「そうじゃのう、見たところは粟と同じようなもんじゃ、餅にはつけん粟よう、ねばりがないから。粟のようにこなれがようない。麦のように腹がへらん。麻を刈りとった跡へ蒔くとよう出来た。こういう風にのう、くまごとかぶらの種をいっしょに握って、バラッバラッと蒔くんじゃ」

と、種を蒔くまねなどしながら、

「畑いっぱいに、くまごとかぶらが生えて来ると、百姓は二尺ぐらい幅を置いて、細い筋を立ててそれを間引く。間引いた苗はまばらに生えたところへ植えて、幅広い畝の畑にする。ときどき細い筋を足場にして肥をやり草を取る。くまごはずんずん背が高うなり、かぶらはその下で葉をひろげる。秋、くまごの穂はこがね色に色づいてくると、穂首がもろくなって、小鳥がとまったぐらいでも折れて落ちる。それに小鳥はくまごが大好きで、いっぱいよってくる。小鳥ばかりではない子供もよってくる。畑のほとりのくまごが、道へ向けて頭をたれてくると、子どもらはポンポンポンと、手の平をたてにして穂首の上を叩いて歩く。穂は首のところから折れて、ポタポタポタとみごとに落ちる。子どもらはそれがおもしろいから、叱られても叱られても道端の穂を叩いて歩く。百姓は学校の先生に願い出る。学校というても明治十八九年の学校は、先生が一人しかおらん。一人しかおらん先生は、仁王さんのような顔をして、犯人を呼び出し、右の手の平は上へ向けさせ、その手のくぼみへ水を入れる。左手には火のついた蠟燭をにぎらせる。蠟燭がとけて熱いのが親指の根元へ落ちると子どもらは思わず火を吹き消す。先生はそれを待ちうけて火をつける。熱いわ——こらえておくれ——と、いうひょうしに水がこぼれる。先生は水のこぼれた手の平へ水をいれる。それを十べんもくりかえすと、子供は震え上ってしまうのだが、叩いてくれといわぬばかりに首をたれたくまごの穂をみては、つい叩いてしまうのが子供だ。親が物持ちであったり役持ちであったりすると、先生も遠慮をするが、親のない子は人の分まで罰をう

ける。わしのつれそいの茂市さんは、人の分まで罰をうけた子だ……」

といった調子で話してくれる。これから書くのは、このセキさんの若い日からの物語りである。

セキさんの夫になった茂市さんは、父親がなく、母親は炭焼の下働きなどして、ようやく暮しを立てていて、身よりが少なかったから、一度くまごの穂を叩いて歩くところをみつけられてからは、身に覚えもないのに人の代りに罰ばかりうけたので、学校がいやになって、三年の秋から学校をやめて、母親といっしょに炭を焼くようになった。今でこそ小学校を三年でやめる者はめったにないが、その当時は小学校へ行く者も少なかったから、茂市さんが三年でやめて炭焼になっても、誰も不思議に思う者はいなかった。だが茂市さんは途中でやめたのがくやしくて、学校を卒業した者より、もっと字がよめるようになろうと思った。茂市さんの先祖は平家の残党で、源平の戦に負けてから三次の奥の山の中にひそみ、何代か前に、川の工事の賦役に出て、誰も動かせない大岩を一人で押し上げて堰の土台を築いたので、その功労を認められて、紋と名字と賦役免除の資格をもらったのだそうだ。それは大変な格式で、徳川の末まで威張っていられたのだが、茂市さんの父親は百姓が嫌いで、先祖代々の家も田畑も弟に譲り、自分は石工になって歩き、家柄の自慢だけを妻に残して早く死んだ。茂市さんは小さい時から喧嘩に負けて帰る度びに、母親から先祖の話を聞かされて、負けず嫌いの心を養われていた。それに彼が十四の年の九

月には、笠岡と福山の間に汽車が開通した。その十月には福山から尾道の間が開通した。十五の年の五月には糸崎から広島の間が開通した。茂市さんはまだみたことのない汽車が、文明をのせて、どんどん自分の方へせまってくるような気がして、

「善ヲ見テ習ヒ不善ヲ見テ改ム、善ト不善ミナ我ガ師ナリ」

とか

「馬ハ早ク走ルモノナレドモ勤メズシテハ遠キニ至ルコトアタハズ、牛ハ歩ミノ遅キモノナレドモ怠ラザル時ハ千里ノ遠キニ達スベシ、人学バザレバ道に達スルコトアタハズ」

とか、草を刈りながらでも、炭を焼きながらでも、ちゅうに覚えて口ずさみ、土の上にその字を書いて覚え、十六歳になった時、郵便集配人の試験をうけた。

当時の集配人の採用規程は第一に、十五歳以上四十五歳以下の男子で、身元が正しく性質が実直な者。第二に、身体が強くて走るのが上手な者。第三に、郵便物や電報の表書を読むことができる者。第四に普通の手紙文ぐらい読める者と、かなりむずかしい条件がいった。だから学校へ通わぬ者も沢山いたその頃のセキさんの村では、茂市さんが集配人に採用されると、

「茂市は字が読め字が書けて、村一番に足が早いそうな」

と、評判になり、

「茂市はええことをする、年に冬服一組、夏服二組、笠二つ、合羽二枚、おかみからさがるそう

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

な」

と、羨ましがられた。

セキさんが茂市さんを知ったのは、茂市さんが郵便集配人になった年だった。セキさんはその頃、ナナシキという家の女中をしていた。ナナシキは大地主で、地上にみえる財産もはかり知れないが、地下にかくされた財産もはかり知れない。それは朝日輝く三本杉のもとに埋めてあるといい伝えられていた。朝日輝く三本杉はどこにあるのか知っている者はいなかったが、セキさん達はどこかにそれがあるように信じて、ナナシキの旦那を殿様か何かのようにあがめていた。ナナシキの旦那が、いざどこかへ出るとなると、近所の一軒残らずから一人ずつのお供が出て、籠をかついだり荷物をかついだりして荷次所まで送って出た。旦那は荷次所の道端の茶店に腰をかけて、着て出た道中着をぬぎかえ

「これを帰るまでに洗っとけ」

と、店の小娘にいいつける。ナナシキの小作人でもなんでもない茶店の小娘は

「へい、洗わしていただきやす」

と、かしこまって、旦那のお帰りまでに洗っておかねばならない。もしも洗い方が気に入らぬと

「こんな洗い方で着られるか、気をつけえ」

と、旦那に叱られる。そうすると茶店の親子は一文の洗い賃をもらうわけでもないのに、手をつ

いて平あやまりに、あやまらねばならなかった。そのくらいだからナナシキの女中の中には、旦那にむりに子種を宿されて、奥様にせっかんされ、井戸端のざくろの木に首をくくって死んだ者さえいる。セキさんの親達は山も十町ばかり持っている一町百姓で、先祖は尼子の家臣だったと家柄自慢をする人達で、セキさんはその親達が行儀みならいのために住みこませた奉公人だったけれども、十二の年から奉公して、死ぬより道のないような人々の苦しみをみて来たから、旦那が

「セキよ、お前は色白じゃのう」

と、手を引っぱったり

「お前の髪はすなおなのう」

と、頭をなでたりするのが、みぶるいするほどいやだった。そして旦那からそんなことをされないように、顔にはいつも鍋炭をつけ、頭には手拭をかぶり、井戸端のざくろの木のあたりでばかり働いていた。その頃、茂市さんは郵便物をナナシキの屋敷へとどけに来ては、ざくろの木陰の井戸の水を釣って飲んで行くのが癖だった。

彼は網代笠に紺木綿を蔽うた集配人の笠をかぶっていた。その笠にはまっかなラシャで〒の字が縫いつけてあった。紺の小倉の上着も袖口のところに、まっかなラシャの〒の字が縫いつけてあった。雨の降る日には黒の桐油の合羽を着て來たが、これにもまっかな〒の字が染めてあった。それはセキさんの目にしみこむようにうつった。彼は

「郵便じゃー　早いじゃー」

と、飛ぶように軽々と走った。セキさんにはその声が耳底にいつまでも残った。彼は毎日外を歩くから顔の色が渋紙色にこげ、そっ歯の口をいつも尖らせてつむっていた。けれどセキさんの炭のついた顔をみては、歯を出して笑った。セキさんは笑われると耳まで赤くなりながら、やがて毎日茂市さんを待つようになった。洗濯をしていて、背中の方がむずがゆいような気がするので、後を向いてみると茂市さんが、山道でとったイチゴを持って立っていることもあった。病気で餅のようにふくれた、

つつじの葉の枝を持って立っていることもあった。そのつつじの葉は甘酢っぱくておいしいのだ。セキさんは赤くなり、茂市さんはいよいよ口をとがらせて、何もいわずにその枝を、井戸の井げたの上に置いて帰った。

明治二十七年、セキさんが十五になると、いくら鍋炭はつけていても、べっぴんだという評判で、降るような縁談があった。けれどもセキさんは行こうとしなかった。夜なべ仕事の時にでも下男たちが

「茂市はなかなかできがええ、月給袋は封を切らずに母親へ出すそうな、むだ使いもせんが、おうちゃくもせん。配達がすんだらまっすぐに家へ帰って、服を着かえたと思うたら、もう肥をかつぎに出るそうな、感心な者じゃ、今に身代をこしらえるぞ」

などと話していると、つい耳を澄して聞いていた。この年は五月には霜が降り雪が降り、夏は旱害で米のできが悪かった上に、日清戦争で九月には平壌が落ちたと伝わり、黄海の大勝利が伝わり、十月は大東溝の占領だ、十一月は大連だ旅順だと、この山間僻地も、毎日戦争の知らせで、去年まで一升三銭五厘だった、ここら辺の米の相場も、六銭ぐらいに上って来た。それにつれて麦もくまごも上って、大体米の三分の一の値段で買えるくまごが一升二銭五厘もするようになって、

「こう物が高うなっちゃあ、月給取りも困ろうじゃないか」

と、ナナシキの下男達は話していた。それを聞くとセキさんは、月給を頼りに暮す茂市さんのことが心配だった。

茂市さんの勤めていた郵便局では、茂市さんを十等の七級で採用し、三円の月給を払ったことにして、領収書に印を押させたけれども、本當には半分もくれなかった。半年たつと十等の六級に昇給させて三円二十五銭の領収書に印をおさせた。けれども本當には一銭も昇給していなかった。それは集配人の給料だけではない、逓送人の給料も、書記の給料もみなそのようにごまかして、逓信省からおりる手当を横取りしていた。茂市さんは当然自分がもらうべきものを横取りされていると思うと腹が立って、会計検査が来た時に、逓送人といっしょになって、このことを訴えた。

ところが会計検査人は

「どこの局もみんなそうだ」

と、相手にしなかった。

「そんなら自分達はどこをごまかすんか」

と聞いたら、会計検査人は

「ここらの者はくまごで暮すんだから、町の三分の一でも生きて行けよう」

といった。雨の降る日も雪の降る日も、人里離れた奥山道を、走り歩いて勤めても、それは町の

集配人の三分の一の給料にしかならないで、三分の二は郵便局長を肥らせるのかと思うと、若い茂市さんは馬鹿らしくて、郵便集配人をする気がしなくなって来た。

茂市さんは何か働きがいのある仕事はないかとあたりをみまわした。隣村には明治二十年、彼がまだ小学校に通う頃、県道が開通して、そのあくる年から、この道を荷車が通るようになっていた。最初の荷車は押し車といって、後に一本の棒をつけ、棒を押して歩く車だったが、それでは沢山の荷を積んで梶を取ることが出来ないので、二三年たつと引き車になった。この頃米一升の値段が三銭五厘で、布野から赤名へ五里の道を、一日一台の荷車が往復すると、一円の駄賃になった。そうすると一日で三斗俵一俵の米が買えるというので、元気のいい青年は目をみはったが、三斗俵一俵が一円の時に荷車一台六円では、ちょっと手が出ない。上布野に石州の荷物を扱う問屋があって、自分は車を引かないのだが、荷車を何台か持って、引きたい者には貸していた。茂市さんはそこへ行って、荷車をかりて引こうかと思ったが、しらべてみると、水上げの半分は車の借り賃に取られるということがわかって、これも考えさせられた。金をためて、荷物運送のはげしい道端に家を持ち、荷車何台か持った問屋になるんだと、問屋の夢を描いて茂市さんは、月給はもらってもそれには手をつけず、家へ帰ると服のボタンをはずすのも、もどかしいほどいそいで、ぼろ着物に着かえ、人の嫌う肥かつぎなどに雇われて、親子が食べるくまご代ぐらいは稼ぎ出し、隣村へ家を持つ準備をした。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com